
恋の魔法を唱える王様

wktk

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の魔法を唱える王様

【Nコード】

N9338Z

【作者名】

wk tk

【あらすじ】

人々が夢見る大舞台、王座杯。その決勝戦で敗れた少年は、自分に勝ち女王となった女の従者になった。一般人の常識を大きく無視した規格外たちに囲まれ、少年は自分を見失うことなく頑張っているのかなんとか。そんな少年の苦悩と挫折と栄光を描けたらいいなあと思う今日この頃な物語。

第一話「始まりは決勝戦」（前書き）

段落のつけ方とか情景描写とか、いつもと違う感じで書いていきます。残酷な描写が無いとは言いきれませんが、極力書かないつもりです。基本ほのぼのです。ハッピーエンド希望です。

第一話「始まりは決勝戦」

空を見上げる。

今日という日を祝うかのような、どこまでも澄み渡る青い空だ。

ワアアアアアアア！！！！

もつとも、せつかくの快晴もこの大歓声の中では、気分を落ち着かせるには至らないらしい。
むしろなんでこんなに晴れてるんだよと八つ当たりしたくなってしまふ。

「あーあ、場違いだよなあ………僕」

軽い現実逃避気味にぼやく。ぼやきでもしないと、とてもじゃないけどやっていけそうもなかった。

確かに、自分で望んで参加したことではあるのだけど。こんなことになるなんて。

「さあ、五年に一度行われるこの“王座杯”もいよいよ大詰めとなりました！」

この大会の司会の男が拡声器を通して声高に叫ぶ。

そう、今日は何を隠そう、王座杯の決勝戦なのである。

王座杯　それは、簡単に言えば『王様を決めるための武闘大会』だ。

この国では五年に一度、王が代わる。この王座杯を勝ち抜いた人がその年から五年間、王の名を冠するということになっており、他の国から見て異常とも言えるこの仕組みはなんと建国から六百年続く伝統なのだ。

もちろん五年間しか王の位に座せないから、王がこの国の権限すべてを取り仕切るということはない。王として出来ることと言えば、

常識の範囲内でほんの少し特例を作ったり、その期間の国の指針を決めたりといったお遊び程度のことだ。実質この国の王とは『一般国民の夢見る絢爛豪華な生活を体験できる仕事』というような認識になっている。

しかし、ある程度勝ち上がれば褒賞が貰えるし、運良く優勝できればその後の人生は保証される。怪我をする危険はあるが、死ぬことは無い。旨い話には裏があるものだが、国が主催する行事とあつては疑いようもない。

豪華で贅沢な暮らしを夢見て、国中から腕に自信のあるものが集まる。参加するその人数はおよそ一万人。なんと全国民の十分の一が参加するのだ。

それで、何故か僕はその決勝戦にいた。

「さて、今大会の王者　国民の尊敬と羨望を一身に受けるのはどちらの選手なのか！！　まずは竜の門から、シャインフォード・キリングル選手です！！」

名前を呼ばれ、舞台の中央に向かって歩いていく。

途端に、今までの比ではないほどの大歓声が響き渡った。

「うおおおおおおおおお！！！！」

「チビすけー！！　応援してっぞー！！」

「シャイナちゃん頑張ってー！！」

拡声器の近くに居るのか、それとも自ら拡声の魔法を使っているのか判らないが、いくつかの声が他大勢の歓声よりも目立っている。というか、僕はチビすけじゃない。あと、なに勘違いしてるか知らないけどシャイナは女の子につける愛称だ。

むっとして声が聞こえた方を振り返るが、この観客の中から個人を特定するのは果たして無理である。

しかたなく、応援らしい声に手を振って応じる。案の定爆音のような歓声が返ってきた。

もうやけくそだ、ちくしょー。

「続いて虎の門、こちらはなんと珍しい女性剣士！！ シオン・ウエルネファイア選手です！！」

明らかに僕の名前が呼ばれたときよりも更に大きな歓声が起こる。どうやら、向こうの方が人気が高いらしい。

（それもそうだよな。女性剣士が本選に残るのって、大会初らしいし。ましてや決勝なんて）

どんな豪傑が来るのだろうか。

僕は怖いもの見たさのような気分で、相手が舞台上上がってくるのを待った。実のところ、相手がどんな選手か見たことがないのだ。

噂には聞いていたが、彼女が試合のときは僕も試合だし、控室で顔を合わせる機会もない。選手とは言え、流石に男女は別に部屋を設けているのである。

次第に高まる大歓声と共に、相手の選手が舞台端の選手控えから出てきた。

彼女の姿を目にしたとき、僕はたぶん、ポカンと口を開けていた。

（う、うわぁ……綺麗な人……）

そこには、はっと目を見張るような美しい女の人がいた。

女の人、というのは彼女が僕よりも少し年上に見えたからだ。

遠いのにハッキリ判るほど整った顔立ちと、黒真珠のように引き込まれるような艶のある長い髪。それを動き易いように括り上げている。

綺麗というには止まらず、年若さに相応な可愛らしさも兼ねている。

正直言つて、今までこんな綺麗な人見たことない。

（なるほどね……こりゃ、人気もでるわけだ）

この大歓声にも納得。むしろ、観客席から飛び込んでくる男がいななことの方が不思議になるくらいだ。それくらい、彼女は魅力的に見える。

それにしても、華奢な身体つきである。明らかに僕よりは身長が高いが、この細身で果たして剣が振れるものだろうか。

彼女が戦っている姿というものが全くと言って良いほど想像できない。

「うーむ……と悩みながら、対戦相手という特権を大いに利用して不躰に彼女を眺める。」

すると、彼女は僕の視線に気付いたのか、先に舞台上がっている僕の方を見た。

「……………!!」

その瞬間、彼女は大きく目を見開いた。

何かにびっくりしたようだが、なんだろう。もしかしたら、僕と同様に対戦相手についてほとんど知らなかったのかもしれない。

確かに僕も、見れば驚くはずである。

なにせ、僕は17歳と大会最年少の本選出場者であり、更にその年代の男の子と比べてもとても小柄だからだ。

決勝戦に勝ち残ってくる男を屈強な男と想定していて、そこに子供がいればビククリするのも当然のこと。

まあ、こっちも同じようにビククリしたし、痛み分けてことで。

「では、両者前へ!!」

司会の男の人の言葉に従って、舞台の真ん中近くまで歩み寄る。

僕は魔術師だからホントは遠距離から戦い始めたいんだけど、一対一なら魔術師に利があるし、ハンデだからしかたがない。

走れば数秒と経たず潰されてしまう距離まで近づいて、試合開始の合図を待つ。

そこで僕は自身に寄せられる強い視線に気付いた。

「……………ん？」

顔を上げる。が、しかし相手は恐るべき速度で目を逸らしたらしい。対戦相手である彼女は、明らかに不自然な中空を睨んでいた。隠そうとしているのかもしれないけど、バレバレである。

対戦相手なんだから、睨むのは自然だと思うんだけど。気が弱いわけでもないだろうし、なんで目を逸らすんだろう？

首を傾げる僕は、もう一つあることに気付いた。

（あれ？ この人 ）

と、そこで会場中に響き渡る、歓声に決して負けない大きな鐘の音が鳴った。

思わず、考えていたことが頭の中からすっ飛んで消える。この合図は

「試合、開始だー！！！」

司会の男の人の絶叫を皮切りに、王を決める大会 王座杯の決勝戦は幕を開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9338z/>

恋の魔法を唱える王様

2011年12月29日05時02分発行